

理念「文化立都」の解釈は時代の変遷とともに…

1982年、『大阪21世紀協会』は「大阪21世紀計画」の推進団体として発足し、推進のためのガイドラインとして「基本理念」と「基本構想」を提言し、推進のためのガイドライン「グランドデザインの基軸」を策定した。

1992年、発足から10年が経過し、提言に盛り込まれた大型事業が次々に実現し当初の目的をほぼ達成したため、新たに次の10年を展望する『新グランドデザイン』を策定し、「文化立都」という概念を提唱した。「本来、産業と文化の関わりは車の両輪であり、産業の隆盛が文化の発展を促し文化の発展が産業の充実を増進させ、双方が並び立ってこそ都市は繁栄する」という基本認識を踏まえた概念であり、以後、「文化立都」をこの組織が目指すべき理念に掲げてきた。

この「文化立都」の実現を21世紀の大阪の最大テーマとし、具体的には文化の根幹を「学術・技術」、「芸術」、「スポーツ」に分け、

- ①学術・技術には「博物館」
- ②芸術には「劇場」
- ③スポーツには「競技場」

を空間イメージとして、「博物館都市」、「劇場都市」、「競技場都市」といえる都市像が重なり合った都市の実現を「文化立都」の目指す姿と解釈してきた。

「文化立都」を掲げて以来30年が経過し、3つの都市像が目指すそれぞれの施設整備も進んできた。今ではそれぞれの施設で文化・芸術・学術・スポーツの多様な行事が展開され、それを目的に国内外から多くの人々が集まり賑わう、そんな都市像（文化観光都市）を目指しているといえよう。地域によっては定住人口の減少による衰退を、多様な行催事を目的に集まる人々による交流人口で活気を生み出して補おうとしている所も多い。

よって、ここで時代の変遷を顧みて、今回のグランドデザインからは「文化立都」の概念を、「博物館、劇場、競技場等の施設整備を目指す」から、「これらの施設の活用により国内外から人々を呼び込み、人々が集まり賑わう都市像（文化観光都市）の実現を目指す」という解釈に改めるものである。